

福岡・大宰府跡^{だざいふ}

- 1 所在地 福岡県太宰府市大字観世音寺字広丸
- 2 調査期間 大宰府史跡第九六次調査 一九八五年（昭60）六月～一〇月

3 発掘機関 九州歴史資料館

4 調査担当者 高倉洋彰・横田賢次郎・森田 勉・赤司善彦

5 遺跡の種類 官衙跡

6 遺跡の年代 弥生時代、奈良時代・平安時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は、大宰府政庁跡中軸線から西へ四三〇mに位置し、鏡山



（太宰府）

猛氏の条坊復元案では、右郭五条五坊にあたる。西北に位置する水城小学校の校庭より「遠賀団印」が発見されたことから、筑前国府の存在が推定されており、これと関連する遺構の存否を確認することを主目的に調査を行なった。調査面積

は一二〇〇㎡である。

検出した主要な遺構は、掘立柱建物五棟、柵一条、溝九本、井戸一基、土坑、ピット群などである。建物を主として時期を区分すると、第Ⅰ期はL字型に配置されたSB二八二五・SB二八三〇で、八世紀後半以前。第Ⅱ期はSB二八二〇で、八世紀後半。第Ⅲ期はa・bの二小期に分かれ、a期はSB二八三五と井戸SE二八四五で、九世紀後半、b期はSB二八三六で、一〇世紀中頃となる。第Ⅰ・Ⅱ期は官衙または官人宅、第Ⅲ期は住居と考えられる。SB二八三〇・SB二八三五は五条大路推定線上にあり、少なくとも九世紀後半以前には、五条大路が推定位置になかったことを示している。

木簡は、調査区北半部西南隅付近で検出された第Ⅲa期の井戸SE二八四五から三点出土した。概報では二点出土したとし、判読できないため報告を省いたとするが、今回再調査を行なった結果、三点の出土を確認した。

井戸の埋土上層は中世の遺物を含み、中層と下層からは多数の土師器と滑石製の風字硯、木製品などが出土した。埋土下層の年代はこれらの遺物から九世紀後半と考えられる。一方木簡の時期は、有頭丸棒や曲物底板などの木製品とともに、井戸の中層から出土しているため、九世紀後半以降である。

8 木簡の釈文・内容

- (1) □ □ (103)×18×6 019
- (2) □ (147)×21×3 081
- (3) □ (149)×9×7 081

(1)は右辺と下端削り、上端折れ、左辺は二次的切断である。墨痕が二文字分認められるが、左辺の切断によって右半分しか残存しないため、判読できない。二文字目は草冠の一部とその下に「口」を二つ重ねた線を追うことが可能である。(2)は上下両端折れ、左右両辺削りである。墨痕が一文字分あるが判読できない。(3)は上端が斜めに折れ、下端も折れ、左右両辺は二次的切断である。右上から左下にはらった墨線が三本あるが、右半分が切断されているため、判読できない。

9 関係文献

九州歴史資料館『大宰府史跡昭和六〇年度発掘調査概報』(一九八六年)

(酒井芳司)

西海道古代官衙研究会編

『西海道出土墨書土器集成』の刊行

本書は、西海道地域出土の墨書土器(刻書土器なども含む)を一覧できる便利な資料集である。九州において幅広い参加者を得て活動を続け、本年九月一五・一六両日に開催した九州特別研究集会の後援団体としてもご協力をいただいた西海道古代官衙研究会が、特別研究集会を契機に編集・刊行したものである。国単位で、県・市町村・遺跡名・(調査)次数・(出土)遺構・土層・種別(墨書か刻書かなど)・対象物(須恵器・土師器・瓦など)・器形・世紀・時代・文字種(釈文・備考・文献の各項目を表の形で列記し、遺跡ごとに主要なものの図版を掲載している。

A5判 六四頁。頒価一五七五円(税込)

お問い合わせ。お求めは、左記まで。

六一書房 電話 〇三―五二八―一六一六一

FAX 〇三―五二八―一六一六〇